

誰のモノ？：『タール・ベイビー』 における「財産」

銅 堂 恵 美 子*

序

トニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-2019) の第四作である『タール・ベイビー』(*Tar Baby*, 1981) には、家や土地に加え、「いにしえからの特質 (ancient properties)」¹ と呼ばれる「黒人としての真正さ」² とは一体誰のモノか、誰が継承すべきなのか、という問いが散りばめられている。作品の舞台となるカリブ海に浮かぶ小島—《騎士たちの島》(Isle de Chevaliers)—は、キャンディー工場の元所有者であるヴァレリアン・ストリート (Valerian Street) によって私有地化されているが、その所有権の正当性は、彼の使用人や島の住民、さらには島の自然景観によって問いただされている。1980 年前後を舞台に、グローバル化や消費主義の影響により文化の均質化が加速したことで、継承が困難となる黒人の伝統的価値観についても、正当な継承者は誰か、また、その継承はいかにして可能となるのか、という問いが作品の中核的問いの一つとなっている。

* 福岡大学人文学部講師

¹ Toni Morrison. *Tar Baby*. Vintage, 1981, p. 305. 以降この作品からの引用は、ページ数のみ記す。

² Angelita Reyes は、“ancient properties” をアフリカ系アメリカ人の「アフリカ人としての意識 (their African consciousness)」(19) であると指摘し、Anissa Wardi は「黒人女性の真正さ (Black female authenticity)」(3) と分析する。本論では、両者の意見を踏まえながら、“ancient properties” の、property の別の意味 (財産や遺産) に着目し、無形文化遺産としての黒人の伝統的習慣や価値観として捉えたい。

モリスンは『タール・ベイビー』において、白人社会と黒人社会の衝突だけでなく、中産階級の北部黒人と貧しい南部黒人との摩擦や、アフリカ系アメリカ人とアフリカ系カリブ人との不和など、黒人社会内部の衝突を描くことで、「白人社会」対「黒人社会」という単純化された二項対立関係を細分化し、二元論的思考の枠組みから視点を転移させている。ストリート一家の使用人である叔母のオンディーン・チャイルド (Ondine Childs) とその夫で「フィラデルフィアの黒人 (a Phil-a-delphia Negro)」(163) を自負するシドニー (Sydney) に育てられ、モデルとしてニューヨーク、パリ、カリブ海を軽快に移動するジェイディーン (Jadine) と、フロリダ州のイーロー (Eloe) と呼ばれる小さな黒人共同体出身のサン (Son) のロマンスは、作品の中心的プロットを成す。初期の批評は、サンを黒人文化の継承者として評価する一方で、ジェイディーンを「文化的孤児 (a cultural orphan)」(Mobley 143) と呼んで非難し、二人の関係を善と悪の「対立」に位置付けて読むものが多くみうけられる³。しかしながら、ある場所に「根ざすこと (rootedness)」のみならず、「経路 (route)」を重視するディアスポラや離散の概念に結び付けて考察する批評では、かつて「偽物 (inauthentic)」と酷評されたジェイディーンを再評価し、作品に新たな意味づけを行うことに成功している⁴。すなわち、『タール・ベイ

³ 初期の批評が Son か Jadine のどちらがより authentic であるかという問いに強い関心を寄せた理由について、西本は作品が出版された 80 年代の社会状況が関係していると説明する。「公民権運動が輝かしい成果と共に失望や焦燥感をも残して終息し、ブラック・パワーの主張が政治と権力に歪められ追いつめられる中、やがてアフリカ系アメリカ人社会内部にさらなる格差を招くことになるレーガン政権が誕生したまさにその年に、この小説が発表された。」(西本 60)。なお、Morrison 自身はどの登場人物にも誤りが存在することを指摘しており、*Tar Baby* が、二項対立という単純化された思考の枠組みを超えて、「どちらか」ではなく、「どちらも」という枠組みで思考することを促す作品であることを示唆している。“I may have some attitude which one is more right than the other, but in a funny sense that book was very unsettling to me because everybody was sort of wrong.” (Taylor 178)

⁴ Yogita Goyal は “The Gender of Diaspora in Toni Morrison’s *Tar Baby*” において、Son の黒人文化至上主義的側面を指摘しながら、Jadine を “a cosmopolitan and diasporic subject” として捉えなおしている (397)。

ビー』とは、ディアスポラの「故郷への渴望」を描きながら、新たなホームを自ら創造する可能性を模索した作品であり、それは『パラダイス』(Paradise, 1998)で描かれることとなる新たなホームの創造という作家の活動の歴史を見据える作品として捉えることができるというものである。本論では、こうした議論の流れを踏まえながら、財産や「いにしえからの特質」といったものの価値の再考が、新たなホーム創造の可能性と深く結びついている事を明らかにしていきたい。

アメリカ起源以来、市民としての身分の決定、政治的権利の保障、また人種的特権の確立という点において、「財産 (property)」は、基盤概念として機能した。土地所有者には市民としての権利が付与され、所有権を持つ者には、社会的・法的権力が与えられたが、こうした権利は人種的権利と同義となった。ネイティブ・アメリカンの土地を占有した植民地化の歴史に加え、黒人を動産として所有することを法的に正当化した奴隷制度は、アメリカにおける「人種」と「財産 (property)」の複雑な関係性を構築してきたのである⁵。アメリカの独立宣言にも大きな影響を与えたジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) が、所有の原理として提唱した自己の身体の所有権は、奴隷と主人の身分を分かち決定要因となった。再建期には、自己の身体の所有権を得た黒人の関心は、モリスンが『パラダイス』で描いたように、白人社会の暴力や搾取から身を守るための土地や財産の獲得、およびその保護へと移っていったのである。『タール・ベイビー』では、カリブ海へと舞台を移すことで、アメリカ大陸を超えて繰り広げられた奴隷貿易と植民地支配の歴史に射程を広げ、人間や自然を「所有物」として支配する暴力的・排他的メカニズムを詳らかにすると同時に、財

⁵ Cheryl Harrisは、“Whiteness as Property”において次のように考察する。
 “The origins of property rights in the United States are rooted in racial domination. Even in the early years of the country, it was not the concept of race alone that operated to oppress Blacks and Indians; rather, it was the interaction between conceptions of race and property that played a critical role in establishing and maintaining racial and economic subordination.” (Harris 1716)

産所有の問題に照射しながら、黒人の伝統的価値観の継承の在り方について再考を促している。

I. 「楽園」の再創出とその所有

ヴァレリアンによるカリブ海における楽園の再創出は、奴隷を使用したサトウキビの大規模農業が行われ、プランテーション文化が現在に至るまで大きな影響を与えているカリブ海地域の植民地支配と奴隷制度の歴史を想起させる。フィラデルフィアにあるキャンディー工場の元社長であったヴァレリアンは、退職後、「ただ同然の値 (for almost nothing)」(53) でドミニカ共和国の近くに浮かぶ架空の小島を購入する。《騎士の島》と呼ばれる逃亡奴隷の神話が眠るこの島の丘の上には、島で最も壮麗な屋敷として知られる「十字架館 (L'Arbe de la Croix)」を建設し、それに加えて「永久的に開花状態が続くよう統制された植物 (controlled ever-flowering plants)」(53) のための温室を併設する。かつて植民者たちが、アフリカからの奴隷だけでなく、世界の様々な場所から人や植物を集めてカリブ海にエデンを再構築しようとしたように⁶、ヴァレリアンは《騎士の島》には自生しないアジサイを持ち込み、クリスマスの日には、カリブ海では手に入らないリンゴを輸送させる。慣れない土地で必要な労働力のためには、島の住民テレーズ (Thérèse) とギデオン (Gideon) を雇い、フィラデルフィアの自宅の使用人であったシドニーとオンディーンを引き連れてカリブ海へと移住するのである。

ヴァレリアンは、島を私有地化して「楽園」を建設することを「地味で控えめといえる願い (a simple, modest enough wish)」(53) と考えるが、彼の行為は、《騎士の島》の川を「辱め (insulted)」、「悲嘆 (heartbroken)」に暮れさせている (10)。島の自然は彼の行為を「世界の終わり」と感じとるのである。

⁶ (斎藤 199)

When laborers imported from Haiti came to clear the land, clouds and fish were convinced that the world was over, that the sea-green green of the sea and the sky-blue sky of the sky were no longer permanent. (9)

砂糖によって富を得たヴァレリアンは、カリブ海の自然を破壊し、ハイチ人の労働力を搾取して「南北戦争以前のプランテーションの典型 (a stereotypical antebellum plantation)」(Page 112) である《十字架館》を建設するのである。カリブ文学とプランテーション文化について考察する Sylvia Wynter は、カリブ社会はプランテーション社会であると述べた上で、新世界の発見以来、自然の一部であった人間は、自然を「非人間化 (“denumanization”）」することで、自然の「所有者」となったと指摘する (99)。自然の一部であった人間を自然から切り離し、自然を人間の下に置く支配のメカニズムは、モノ化、所有化の基盤として機能している。しかし、モリスンはこうしたモノと認識される自然を擬人化することで、支配されるモノに声を与え、語らせ、その暴力性を問うているのである。

所有権の所在やその意味の再考という問題は、サンやジェイディーン、シドニーとオンディーンが一同に集まるクリスマスディナーの席で勃発する。カリブ海では手に入らないリンゴを準備しろと命令され、島々をボートで乗り継ぎ、苦勞してリンゴを入手したテレーズとギデオンの好物であったリンゴを少しばかり捕って食べた際には、ヴァレリアンは彼らを「盗人 (thieves)」と呼んで解雇する。テレーズとギデオンの本名を知ろうともせず、二人を勝手にメアリー (Mary) と雑役夫 (Yardman) と呼び、彼らの存在を軽視するヴァレリアンにとって、二人には労働力以外の価値などなく、解雇宣告を告げるのは、ヴァレリアンの所有者としての正当な「権利」なのである。

そもそも「財産 (property)」とは「物」を意味するのではなく、「物」に対

する「権利」を意味する (MacPherson 6-7)。すなわちそれは、法の範囲内で自分の所有物である財産を自分の意志に従って処分及び管理する権利である。Cheryl Harris は、この「排除する権利 ([the] right to exclude)」こそが「財産 (property)」の根本原理であると指摘する (Harris 1714)。すなわち、ヴァレリアンがテレーズとギデオンを解雇 (排除) するのは、ヴァレリアンにとっては、所有者として当然の権利なのである。しかし、こうした排除のメカニズムが前提とする資源や労働力を等閑する姿勢は、サンによって糾弾される。

Son's mouth went dry as he watched Valerian chewing apiece of ham, his head-of-a-coin profile content, approving even of the flavor in his mouth although he had been able to dismiss with a flutter of the fingers the people whose sugar and cocoa had allowed him to grow old in regal comfort, although he had taken the sugar and cocoa and paid for it as though it had no value, as though the cutting of cane and picking of beans was child's play and had no value; but he turned it into candy, the invention of which really was child's play, and sold it to other children and made a fortune in order to move near, but not in the midst of, the jungle where the sugar came from and build a palace with more of their labor and then hire them to do more of the work he was not capable of and pay them again according to some scale of value that would outrage Satan himself and when those people wanted a little of what he wanted, some apples for *their* Christmas, and took some, he dismissed them with a flutter of the fingers, because they were thieves, and nobody knew thieves and thievery better than he did and he probably thought he was a law-abiding man... (202-3)

労働力や資源を搾取して富を獲得し、経済的・社会的地位を得たヴァレリアンに対するサンの批判は、資源や労働力がモノ化され、商品化されたのちに富となり、「財産」という権力と化す過程を明らかにしている。

しかしながら、オンディーンがキッチンの所有権を主張し、ギデオンとテレーズをヴァレリアンの使用人ではなく、自分の労働を支える存在であると指摘するとき、ヴァレリアンはオンディーンに対し、解雇を宣告するが、それは「何の効力も持たない (held no force)」(207)。なぜなら、ヴァレリアンと彼の妻マーガレットには、オンディーンやシドニーの持つ知恵も技術もなく、彼らの支えのない生活など想像することさえ不可能だからである。

“*Your kitchen? Your help?*” Valerian was astonished.”

“Yes my kitchen and yes my help. If not mine, whose?”

“You are losing your mind!” Shouted Valerian. . . . Valerian stood up. “If you don’t leave this room I’ll . . .” It was the second time he ordered a dismissal and the second time it held no force.

“What? You’ll what?” asked Ondine.

“Leave!” said Valerian.

“Make me,” said Ondine. (207-8)

所有者であるヴァレリアンの持つ権力は、労働者であるオンディーンとシドニーの存在なくして機能することはないのである。息子マイケルが妻に虐待されていた過去を知り、生気を失ったヴァレリアンの権威が失墜するとき、シドニーやオンディーンの力は増大し、管理されていた温室は自然界からの侵食を受け始める。モリスンは、所有権の排他的、依存的仕組みを明らかにすると同時に、その権力の弱体化の過程を描きながら、所有者と所有物の間に設定された境界線の不安定性を明らかにしている。しかしながら、本作において、ヴァレリア

ンが財産の所有権を放棄することも、シドニーとオンディーンが所有物としての地位から脱することもない。シドニーとオンディーンが「自分たちのモノと呼べる家を持たない (They had no house, no place of their own.)」(233) という事実最後まで変わらない。両者は、所有権にまつわる攻防を繰り返しながらも、どちらも所有者と所有物という関係から解放されないのである。モリスンは、所有権に伴う排他性や暴力性を明らかにし、労働者と所有者の依存関係を暴く一方、その複雑で共依存的関係を解消する難しさも描いているのである。

Ⅱ. 財産相続—誰が正当な継承者か？

家系は富や財産の継承の場としてだけでなく、文化の継承の場として機能する。父系血統を中心とする家族集団であるヴァレリアン一家では、白人上流階級としての経済的・社会的地位が男系子孫による財産相続によって世代を超えて保護されている。ヴァレリアンの祖母には4人の息子がいたが、男児を生むことができたのはヴァレリアンの父の妻だけであった。ヴァレリアンは、生まれた瞬間に「家族の未来 (the future of the family)」となり、父が亡くなった際には、7歳だったにも関わらず、家業を継ぐことを「自ら理解 (“self-understood”）」していた (50)。一方、白人富豪一家の使用人として働き、自分のものと呼べる家も持たないシドニーとオンディーンには、子孫に譲る財産など存在しない。親を亡くした姪のジェイディーンには、黒人使用人としての地位から脱出させるため、教育の機会を与えようと、雇い主のヴァレリアンに学費を工面してもらう。パリのソルボンヌ大学で美術史を学び、モデル兼女優として活躍するジェイディーンは、経済的成功と裕福な恋人を獲得する。使用人としてではなく、ヴァレリアン一家と共にテーブルを囲んで育ったジェイディーンは、シドニーが自負する「フィラデルフィアの黒人」としての誇りを受け継ぐのではなく、ヴァレリアン一家の持つ白人財産の一部 (学費) とその文化を継承しているのである。

ジェイディーンが継承したヴァレリアン一家が体現する資本主義社会の価値観は、パリの富豪の恋人リーク (Ryke) から贈られたアザラシの毛皮に対する彼女の態度に集約されている。90 頭ものアザラシを犠牲にして商品化された毛皮のコートに性的に欲情するジェイディーンの姿は、Jean Wyatt が指摘するように、資本主義経済が人間の思考や感情を歪め、モノへのグロテスクな意識を生み出す姿を反映している (Wyatt 34)。アフリカ芸術よりもヨーロッパ芸術が「優れている」と考えながらも、「銅色のヴィーナス (copper Venus)」(115) として「黒さ」を売り物にするジェイディーンは、フロリダ州の小さな黒人共同体出身のサンによれば「白人女子 (you little white girls)」(121) なのである。将来的には自立し、オンディーンとシドニーを使用人の地位から解放して共に生活を送る可能性を仄めかすものの、ジェイディーンがそれを実行することはない。

ジェイディーンが「黒人であるにも関わらず黒人文化を継承しない」としてサンやテレーズは強い批判や嫌悪感を示す。ヴァレリアンの息子マイケルでさえ、「自民族の歴史とその人々を放棄している (He said I was abandoning my history. My people.)」(72) と述べてジェイディーンを糾弾する。しかしながら、黒人文化の継承を誘導したり強制したりする外部からの干渉によって、ジェイディーンは「恐怖 (fear)」(123) や「恥 (shame)」(123) の感覚を抱き、自分が「孤独で偽物 (Lonely and inauthentic)」(48) であると考えさせられる。黒人民族主義者を体現すると評されるサンが、自分の価値観を彼女の夢の中に植え込み、「彼女の夢を操ろう (to manipulate her dreams)」(119) とする様や、彼の故郷イーローが男たちを中心とした「同胞愛 (fraternity)」(168) を基盤とした黒人共同体であり、彼の価値観が黒人女性に黒人文化の伝統を育成する「母」としての役割を強要するものであることが明らかになるにつれて⁷、ジェ

⁷ John N. Duvall は、黒人至上主義的で性差別的サンの行動を分析し、ジェイディーンを実はレイプしている場面が存在すると指摘する (106)。黒人文化の継承者として評価

イディーンの黒人文化継承の問題は複雑化する。ジェイディーンの夢に現れる黄色のドレスを着たアフリカ人女性や「夜の女たち (the night women)」（259）、「魔女の乳房 (witch's tit)」（10）と呼ばれる沼地で遭遇した木々の女たちが差し出す乳房と卵は、伝統的黒人社会の「母」「妻」「女」の生き方を暗示し、ジェイディーンの拒絶反応を引き起こす。

最終的にジェイディーンは、黒人女性の伝統の系譜に連なることを拒絶し、「アメリカ人でもなく、黒人でもなく、ただの私 (not American—not black—just me)」（48）で在りたいと述べ、パリへ帰還する。コスモポリタンの現代女性である彼女の未来は、黒人の歴史や文化からさらに遠ざかってしまう。こうしたジェイディーンの姿を批判する批評家は多いが、ここで重要なことは、文化の価値とその継承の在り方に着目することである。すなわち、『タール・ベイビー』は、黒人の伝統的価値観を絶対視するのではなく、その男性中心主義的側面を描きながら、黒人の伝統的価値観が強制や誘導によって押し付けられるものではなく、他者とともに「滋養される」ものでなければならないことを示唆している。モリスンは、伝統的黒人文化の価値を再考すると同時に、人種という枠組みの中に限定された強制的継承の在り方を疑問視している。ジェイディーンには、黒人の伝統や価値観を共に滋養し、育む家族やコミュニティの存在が欠けている。

『タール・ベイビー』において、文化や伝統の継承を拒絶するのは、実はジェイディーンだけではない。ジェイディーンやサン影に隠れ、作中も登場することがないため、これまで批評家に注目されることが少なかったヴァレリアンの息子マイケルは、ストリート家の唯一の男系子孫として財産相続の権利を与えられているにも関わらず、キャンディー工場や《騎士の島》を相続することを拒み、ネイティヴ・アメリカンの文化存続のための活動に携わりながら、環

されてきたサン暴力性を明らかにしている。

環境保護弁護士になることを目指している。マイケルは、「金ではなく、人生における価値 (value in his life, not money)」(199) を求めて《騎士の島》を去り、支配者ではなく、支配される側に置かれた人や自然に関心を寄せながら、人種や家系の枠組みを超えた他者の文化の価値に目を向けた人物なのである。

ジェイディーンによれば、マイケルは「危険も冒さず痛みもなく愛することのできる他者の文化を求める文化的孤児 (a cultural orphan who sought other cultures he could love without risk or pain.)」(145) であるが、マイケルが「危険と痛み」を避けるのは、彼が幼少期に母マーガレットから受けた虐待体験が関係している。血が出るほど針で痛めつけられて幼少期を過ごしたマイケルは、母からの虐待から逃れるため、洗面台の下に隠れ、言語化できない思いを歌にしていたが、「危険」や「痛み」から逃れた彼が求めたのは、「暗闇の中の柔らかいもの」という母の子宮を連想させる避難所のようなものであった。

Every now and then I'd come home, he'd be under the sink. Humming to himself. When I'd pull him out, ask him what he was doing there, he'd say he liked the soft. He was two, I think, two years old, looking in the dark for something—soft. (76)

マイケルに与えられたストリート家の遺産は、富や財産であると同時に、虐待の体験で肉体及び精神に刻まれた暴力と孤独である。マイケルは誰にも虐待の事実を告げることなく家を去り、所有者・支配者となるのではなく、抑圧される人やモノに寄り添いながら「柔らかいもの」を与えてくれる新しいホームを模索しているのである。しかしながら、ヴァレリアンの目に映るマイケルは、詩 (poetry) に価値を見出し、財産 (property) を拒絶した「永遠の敗者」である。

Margaret did that. She made him think poetry was incompatible with property. She made a perpetual loser of one of the most beautiful, the brightest boy in the land. (75)

「財産 (property)」と「詩 (poetry)」という単語が言葉遊び的に並列され、対比されていることは大変興味深い。搾取に基づく排他的所有権の価値を疑わないヴァレリアンに、「詩」の価値を理解することはできないが、ここでは、支配のメカニズムに基づき、限定的に継承されてきた財産 (property) の価値が、詩的想像力によって揺るがされることが示唆されている。モリスンが後に『パラダイス』で描くこととなる新たなホーム創造に必要となるのが、所有権ではなく、芸術的創造性であることを考慮するならば、マイケルが所有権を放棄し、「詩」という芸術的創造性を選択したということは、彼が新たなホームの創造に向けて動き出したと考えることができる。

結

ジェイディーンは過去との繋がりを拒否し、未来を求めてパリへと旅立つ。サンは、「いにしえからの特質 (ancient properties)」そのものといえる盲目の騎士の元へと送られ、過去と一体化する。そしてマイケルは、過去の痛みや悲しみを共有し、傷の回復を癒す避難所を求めてストリート家を去る。これまで、サンとジェイディーンの物語に着目して読まれた『タール・ベイビー』論では、この作品が「深い悲観主義 (a deep sense of pessimisms)」(Willis 685) に満ちた作品であると評されてきた。しかしながら、白人富豪一家ストリート家の財産相続を放棄し、他者の文化に価値を見出すマイケルに着目することで、『タール・ベイビー』の新たな側面を見定める事ができる。『タール・ベイビー』は、自文化および他者の文化の価値を再考し、強制ではない、創造力に基づく文化遺産継承の可能性を探っている。このことは、新たなホームが

排他的に所有・継承されるモノではなく、開かれたホームとして創造され、共有される「楽園」として描かれた『パラダイス』へと通じているのだ。

*本研究はJSPS 科研費 JP20K12974 の助成を受けたものである。

参考文献

- Baillie, Justine. *Toni Morrison and Literary Tradition: The Invention of an Aesthetic*. Bloomsbury, 2015.
- Beavers, Herman. *Geography and the Political Imaginary in the Novels of Toni Morrison*. Palgrave Macmillan, 2018.
- Dixon, Melvin. *Ride Out the Wilderness: Geography and Identity in Afro-American Literature*. U of Illinois P, 1987.
- Duvall, John N. *The Identifying Fictions of Toni Morrison: Modernist Authenticity and Postmodern Blackness*. Palgrave Macmillan, 2000.
- Goyal, Yogita. "The Gender of Diaspora in Toni Morrison's *Tar Baby*." *Modern Fiction Studies*. Vol. 52, No. 2, 2006, pp. 393-414.
- Harris, Cheryl I. "Whiteness as Property." *Harvard Law Review*, vol. 106, no. 8, 1993, pp. 1707-91.
- Harris, Trudier. *Fiction and Folklore: The Novels of Toni Morrison*. U of Tennessee P, 1993.
- Holloway, Karla F. C., and Demetrakopoulos, Stephanie A. *New Dimensions of Spirituality: A Biracial and Bicultural Reading of the Novels of Toni Morrison*. Greenwood P, 1987.
- Locke, John. *Two Treatises of Government*. Edited by Peter Laslett, Cambridge UP, 1970.
- MacPherson, C. B. *Property: Mainstream and Critical Positions*. U of Toronto P, 1978.
- Mobley, Marilyn Sanders. *Folk Roots and Mythic Wings in Sarah Orne Jewett and Toni Morrison: The Cultural Function of Narrative*. Louisiana State UP, 1991.
- Morrison, Toni. *Tar Baby*. Vintage, 1981.

—. *Paradise*. Knopf, 1998.

Page, Philip. *Dangerous Freedom: Fusion and Fragmentation in Toni Morrison's Novels*. UP of Mississippi, 1996.

Reyes, Angelita. "Ancient Properties in the New World: The Paradox of the "Other" in Toni Morrison's *Tar Baby*." *The Black Scholar*. Vol. 17, No. 2, 1986, pp. 19-25.

Taylor-Guthrie, Danielle, editor. *Conversations with Toni Morrison*. UP of Mississippi, 1994.

Terry, Jennifer. *'Shuttles in the Rocking Loom': Mapping the Black Diaspora in African American and Caribbean Fiction*. Liverpool UP, 2013.

Wardi, Anissa. "'Loud with the presence of plants and field life': The Ecology of Resistance in Toni Morrison's *Tar Baby*." *The Journal of Ecocriticism*. Vol. 3, No. 1, 2011, pp. 1-16.

Willis, Susan. "Eruption of Funk: Historicizing Toni Morrison." 1984. *African American Review*. Vol. 50, No. 4, 2017, pp. 683-691.

Wyatt, Jean. "The Economic Grotesque and the Critique of Capitalism in Toni Morrison's *Tar Baby*." *MELUS* 39.1 (Spring 2014), pp. 30-55.

Wynter, Sylvia. "Novel and History, Plot and Plantation." *Savacou*, No. 5, 1971, pp. 95-102.

齋藤みどり 「カリブ文学からみるポストコロニアリズムとエコクリティシズム」『都留文科大学研究紀要』第87集、2018年、197-206頁。

西本あづさ 「時間の遠近法とポスト公民権運動時代の神話—『タール・ベイビー』再読」『新たなるトニ・モリスン』金星堂、2017年、pp. 57-75頁。

風呂本淳子 『アメリカ黒人文学とフォークロア』山口書店、1986年。

吉田廻子 『トニ＝モリスン』清水書院、1999年。